弁内侍ー大村皷城、武蔵野ー坂本錦道、門琵琶ー清水源城

京都琵琶協会　忘年会　十二月二十二日午後二時から京都錦高倉の料亭「富田楼」に於て月例会を兼ね年忘れ懇親会開催。朝来雪こそ降らね今冬一番の寒さというのに好きなればこその琵琶に対する意慾は誠に旺盛で小春のような畳敷の暖かい室内に左記会員が集って過去一年間の回顧談や芸談、雑談に花を咲かせ、夕刻宴会の膳に着いて盃を重ねつゝ山海の珍味に舌皷を打ち来年の奮斗を約して七時過ぎ和やかに散会した。（出席者）戸倉旭嶺、戸田旭公、若宮旭登、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹華水、安住旭康、牧南水、古谷竟水、水内媛水、平井春嶺、村上女史、植村冥水。

日本琵琶振興会　十二月二十三日一時ー月例親睦研究会　八時東京新宿洲鳳会館（会長鈴木流泉氏）。夕刻迄出席者が順次一曲宛演奏したあと忘年会に移った。尚この度吟詠菊水流宗家菅野悠光氏を顧問に迎え今後は琵琶と詩吟が一体となって毎月の懇親会を開催することゝなった。

薩摩琵琶　一月十三日一時ー四時半　晴風新春例会　東京杉並区立高円寺会館。掛合羽衣ー佐藤青苑・竹内青寿・絃晴風、雪晴れー本橋錦颯、春の調べー坂入晴峰、白虎隊ー福島腸水、羅生門ー青木晴城、茨木ー加藤錦陽、俊寛（下）ー大関英子、千曲川ー杉山雅俊、城山ー緒方晴舟、仁科信盛ー山下晴楓、粟津の巴ー望月啞江、清正と秀頼ー浅野晴風、外に吟詠六題

（予　告）

○…小川吟水氏TV放映　二月三日（日）夕五時読売テレビ開局十周年記念「日本史の眼〃熊野詣〃」に一水会大阪支部長の同氏が『敦盛』の一節を放映される

○…京都琵琶協会二月定例茶話会　二月二日（土）午後一時会員矢吹華水女史宅

○…日本琵琶振興会二月懇親例会　二月二十四日（日）正午ー八時、東京新宿洲鳳会館大場穂苑。

（訂　正）

京絃十二月号「日本錦古流琵琶詩吟大会」中、十月二十九日とあるは二十八日、井田玉風氏は玉村町。支部長、向井清洲氏は白井清洲氏の誤り。「安土浄皷院で諸芸奉納会」中、関西琵琶同好会は大阪琵琶同好会の誤り。

同一月号「我が道を行く六十五年」中、第一頁下段五行目「歌や舞う」は「歌いや舞や」、同十一行目「茨木県」は「茨城県」の誤り。「謹賀新年」中、第十三頁下段大場穂花は正派薩摩琵琶四明会の電話番号「〇七五（462）一四二二」は「一四二三」の誤り。

あとがき

騒然とした世情の内に早くも新しい年の一月が過ぎた。アラブ等の石油状報に一喜一憂し高物価、品不足のインフレ対策に我々はいつまでおびやかされるのか。「山雨至らんとして風堂に満つ」の感が深い。京阪神地区をはじめ関東以西の太平洋側各地では未曽有の連続六十日以上も雨を見ないため湿度が五〇%を割り異状乾燥注意報も出っ放しで本稿締切の頃には未だ当分雨は望めそうにないと気象台では報じている。これ以上の乾燥状態が続くと琵琶楽器や家財道具などのお守りに苦労せねばならぬ。湿度が三〇%台になると琵琶や琴三味線などの絃楽器のみならずピアノ、オルガン等の洋楽器にも狂いが生じてくる。大事な琵琶器は適当な湿度を保つ部屋に置くことが何よりも肝要である。年末の郵便ストで新年号の名刺交換お申込みが遅れ締切後到着の分は本号に「寒中御見舞」として掲載させて頂いたがあの混乱で途中紛失のものも或はあったのではあるまいかと心配している。若しその場合はどうぞお申越し下さい。

昭和四十九年二月一日発行（非売品）
編集者　植村冥水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話〇七二六（八五）六〇五一番

琵琶機関紙
京絃
第二三六号　京絃社

楽理を学びながら　合理的に技を磨きましょう（三）

門義則

○十二律に基く薩摩琵琶の調子の採り方

男声は低音の人で一本（一越・D）二本（断金・D#）中音の人で三本（平調・E）高音の人で四本（勝絶・F）五本（下無・F#）を琵琶歌（歌唱）の基音としております。女声は低音の人で五本・六本（双調・G）高音の人で七本（急鐘・G#）八本（黄渉・A）が歌唱の基準音となっております。

琵琶歌の切及止の旋律の終音が歌唱の基音であります。例へば三本の調子の人は謡止の終音は琵琶弾法で第三絃の第三柱（中段の柱）の少し上部を軽く示指で押えた音と、第二絃の開放絃が三本（平調・E）になるのであります。弾法の基準になる第一絃は三本（平調・E）より数へて六律（洋楽にて四度）上の八本（黄渉・A）に調絃いたします。

邦楽では声楽が主であって、その伴奏する楽器を従とし、各々歌唱者の声域に応じて楽器を調絃します、之を相対調絃といっております。琵琶楽でも盲僧、平家、薩摩、筑前等何れも相対調絃であります。

雅楽は管絃合奏でありますので十二律のうちより基準音を採り、常に変へることなく絶対音を保っております、従って之に用いる琵琶及箏は絶対調絃であります。

偖薩摩琵琶の調子は、奏者各自の声域に応じて自由な高度に調絃して良いのが相対調絃であるから、何も面倒な十二律の調子笛や音叉に依って正確に探る必要はないと思へるのですが、やはり自分の声域は年令に依り変ることもあり、芸術的表現、又健康維持にも大切なことであるから、十二律より自分の声が何本であるか正確に測っておいて、演奏直前必ず調子笛なり音叉より調絃して、不安なく余裕を持って演奏をさられることをおすゝめいたします。

先年、錦心流のプロであり最長老である榎本芝水師に楽屋でお目にかゝりました際、今何本で演奏されておられるかを伺いましたところ、F#と言って調子笛を見せて下さいました。F#とは五本であります、最元老の榎本師ですら演奏前には正確に自分の声であるF#で調絃しておられました。

その調子のとり方は、先づF#の調子笛を吹いて直ちにその完全協和音であるB（F#より上へ数へて六番目の律）を勘で合せ、次に第三絃を同音Bに、次に第三絃の第三柱と第二柱の間を第三柱寄りに軽く押えて弾じF#になっているかを検し、次に第一絃三絃を弾じ、第二絃を第一絃より数へて六律低いF#に合せます。最后に第四絃を第三絃より上へ数へて三番目の律C#に合せます。これは五本の調絃の順序と方法であり、左に各絃の律を表にします。

第四絃	C#	上無	十二本
第三絃	B	盤渉	十　本
第二絃	F#	下無	五　本（低音）
第一絃	B	盤渉	十　本

六律下げる　逆順　六律上げる

歌唱の五本の調子を琵琶に採る場合、F#の調子笛を吹かないでBの調子笛を吹いて第一絃に合せる人が多くなり、初心者にはこの方が楽です。この為Bが五本であると思い違える人が出て、調子を本数で称べるのに二種の呼称あり、間違いがおこりやすい上、更に混乱を加えることになるから、私は十二律の日本名を難しくても覚えて採用するか、国際的にも便利な洋楽のABC・・・を使うことをおすゝめするものであります。左に三本の調絃法を示すと

第四絃　B　盤渉　十本　C・神仙十一本
第三絃　A　黄渉　八本　同　上
第二絃　E　平調　三本　同　上
第一絃　A　黄渉　八本　同　上

第四絃をC・神仙・十一本に調絃する方法があります、現在の奏者は何れかを採用しており、その比例は相半ばしていると思われます。後者を採れば第四絃下段の弾法、即ち第四柱の最低音である弾法の基音、宮（第一絃の一オクターブ高い音、音階名の第一音）を軽く薬指先で押えた程度で出ますので初心者にも覚え易く、正確な基準音を出すのに便利であり、又中段（吟替の弾法）及上段（切、相ノ手）を弾じる時も、押音奏法に於て幾分楽な点があると云えます、然し上段の吟替止の弾法に於て、余韻の最低音、微を出すことが出来ませんので、この時は前者の調絃法に変える必要があります。然し乍ら余韻の最低音、微を出さない奏者は勿論そのまゝの調絃法で通せば良いわけであります。私は前者の調絃法を採っております、第四絃下段の弾法、即ち第四柱の最低音、宮を出す時は薬指先で一律だけ押えて弾じており、敏感な薬指先の感度が働き、味わいのある微妙な音色を出すことが出来まして、何等不自由を感じておりません。古来より第四絃の調絃については二説があり、何れも長短があります。私は前者は各絃が互に絶対協和音（第一絃と第三絃）と、完全協和音（第二絃と第四絃、順八。第一絃と第二絃、逆六）の関係にあるので本則調絃と呼び、後者を便法調絃と呼んでおりまして、その各絃の関係は、第一絃と第三絃は絶対協和音、第一絃と第二絃は完全協和音、第二絃、第三絃と第四絃は協和音であるが、完全協和音ではありません。然し第四絃下段の奏法に於て宮音（基準音）を楽に正確に出すことが出来て便利であります。前者を採っている奏者は後者は間違いであり、後者を採用している奏者は、前者はよろしくないと言っておりますが、私は何れも長短こそあれ理論的には前者も後者も正しいと思っております。この薩摩琵琶の第四絃の調絃法の二説があるように、平家琵琶の第二絃の調絃に同じように異説があり、面白い対照であります。（禁転載）

○　○　○

琵琶界時評

琵琶と詩吟。和歌の関係

詩吟節まわしの由来ー山形県民謡吟声ー最大ブームの詩吟

（東京）坂本錦道

琵琶歌の中に和歌が入っているのは余程以前の作からであるが、漢詩が入って来たのは初代吉水錦翁作詩の「桜狩」の中に桜花詩と題する、作者不明の古い漢詩を入れたのが始まりではないかと思われる。これ以後の作詞の中に頻繁に漢詩が挿入されて来た。文体の構成がバライティなものとなり非常に盛り上りが出て来る。従って私共弾奏者にとっては詩吟や和歌は決して無縁なものでなく、血縁の兄弟と云っても差支えない存在である。

琵琶は武士道の中から、詩吟は武士の精神風土の中で育くまれた。琵琶と云い詩吟と云うも、その志向するものは人間の心線に触れると共に、之によって心気が養われ豪壮なる気魄、哀切なる惻隱の情操が生れ、人格陶冶に結び付くことは両者全く同断のものである。

漢詩の吟唱法が今日の如くその骨格が定まったのはさ程遠い昔でない。昔の老漢学者が端座して漢詩を素読する実際は私も少年の頃よく聴いていたが、その素読にも一定の節回しがあった。琵琶に例をとると地の上中下が組合され、大体低音をもって豪快と悲憤のものであった。

こうした漢詩の吟唱は江戸幕府末期（明治を遡る十年前）安政年間、安政の大獄あり天下の物情騒然として風雲急を告げる時、湯島の昌平校や熊本の藩校時習館、桂林荘塾の書生の間に、もっと調子を高く取って盛んに放吟されていた。その頃高杉晋作や久坂玄瑞はその名手として伝へられ、今日に於ても久坂流という一派もある程で、それらの吟唱法が源流となってあまたの志士に受け継がれ、明治維新を経て更に憂国の志士学生達の間に流行、やがて日清日露の開戦という国歩艱難の時代に大流行したことは既に承前の事であるが、之を側面よりバックアップしたものが剣舞である。之は武道の作法を形に組入れ、抜刀白刃の舞を以て観衆の胆を冷やした、つまり人がスリルを味う嗜好性に投じ爆発的の大流行となった。

さて、今日一般に広く謡われている詩吟の節廻しの根源は一体何処から出て来たのか。邦楽評論家の権威町田嘉章先生は「これは紛れもなく民謡の部類に入るべきものである」と云われているが、民謡と云っても非常に広汎な種類があり、盆踊りや酒席の軟派的のもの、もっと落付いた格調高い硬派的のものにも学問上分類されるが、その硬派民謡の中に山形県に明治以前から〝お祝吟声〟という民謡が歌われている。これは同県北村山郡楯岡の国学者菅原通翁の創唱したもので、同翁は文政八年（一八二〇）六月の生れで、十三才の時菊地繁山の塾に学び、後江戸に出て広く国学者と交流後九州に渡り、当時日本一流の国学者広瀬淡窓の門に入って詩文を学んだ。淡窓の塾は桂林荘と称し（一八〇七）その名作は今日広く人口に親しまれ、門下生は四千人に及んだと称される。この時代の漢詩吟唱法の骨格もはっきりと定まらず、それぞれの塾によって相違していたのは云う迄もない。

学を卒え山形の故郷に帰った同翁は前述の〝お祝吟声〟を創唱した。この吟声は明治に入って日本国歌となった「君が代」の歌詞をとっている。今この吟声のメロデーを検して見ると大体漢詩素読の節曲を土台とし、熊本に生れた五木の子守唄にも酷似しているのも妙であるが、かと思えば苅干切、平戸節（追分節の前身）そうして在来の朗詠、和讃、薩摩の影響もあるが、兎も角菅原翁が九州桂林荘の書生達によって放吟された影響は大きく、明治以後の吟唱法にはこうした一つのエピソードのある事も何かの参考となると思う。

茲で話題は一転するが、戦後邦楽の中で退潮の最大なるものは琵琶である。ある評論家の言をかりて云えば「それは明治大正昭和を通じて、軍国主義の片棒を担いだ報いである」と極めつけているが、それは全く見当違いも甚だしい酷評である。イデオロギーの是非の問題はさておいて、国家浮沈の瀬戸際に国民総力を挙げて戦うのは当然の事である。

それでは戦前戦後を通じて驚くべきブームを呼んでいる詩吟はどうか、詩吟の活躍として戦時中は琵琶どころの比ではない、朝から晩まで勇壮な吟声がラヂオから流れ、軍隊や一般国民の練成教育には無くてはならぬものとなり、琵琶の何十倍もの役割を果して来たのは御承知の通りである。（今更茲で内ゲバを起す考えはないが）にも拘らず琵琶のみが軍国主義の片棒云々の罪を負って沈りんの底に沈み、その元凶の詩吟が世を挙げてブームに乗るとは、一体これはどうなっているのか、一部評論家の、したり顔の判定など全く的になるものではない。これは確かに外に重大な原因があると見なければならぬ。（未完）

舞見御中寒

市来芦村
〒659
芦屋市三条町二四八
電話　〇七九七（22）四三三八番

筑前琵琶日本旭会所属
琵琶教室
中島旭穂
〒602
京都市上京区椹木町通堀川東入
電話　〇七五（211）四〇三三番

寒中御見舞

薩摩琵琶高昇流
泉勝院　峰口高昇
〒649　和歌山県白浜町走り湯白良ケ丘
電話〇七三九四（二）二三六八番

一水会新潟支部
伊藤啓水
〒950　新潟市覃山三九九ノ一
電話〇二五二（七六）〇二〇八番

北海道神宮琵琶講相談役
錦心流琵琶道東支部顧問
尊水　北国凌
〒047　小樽市住ノ江一ノ七ノ六
電話（三二）九八三四番

竹下翠風
〒166　東京都杉並区下高井戸五ノ二二ノ一二
電話〇二一（三〇三）五八九四番

青雲流
故　鈴木蘭光
栄子
〒485　小牧市藤島団地四六七号
電話　小牧（七六）七二五七番

京都琵琶協会
一水会京都支部
錦心流
木村維水
〒621　亀岡市千代川町今津
電話〇七七一二（三）〇五六四番

函館琵琶協会々長
錦心流琵琶蘇水会長
函館吟詠連盟会長
高橋蘇水
〒040　函館市青柳町二六ノ一四
電話（二二）八三六五番

琵琶吟詠正吟会々長
伴野鶴風
〒420　静岡市沓谷三丁目一九三ノ二
電話〇五四二（六一）九四四四番

薩摩琵琶四明会
京都琵琶協会
平井春嶺
〒603　京都市北区平野宮西町六四
電話〇七五（四六二）一四二三番

日本琵琶楽協会々員
薩摩篁流高爽会
柏木篁道
〒125　東京都葛飾区鎌倉四ノ三九ノ四
電話（六五八）一九四七番

日本琵琶
三位研修同志会本部
東京都三鷹市上連雀二ノ九ノ十二
大村方

感謝　京絃御愛読御支援
錦心流琵琶
植村寞水
京絃社

狂酔亭漫録（第九十八）

小山田庄左衛門（二）

付父喜内の慚死

古谷竟水

極月十四日夜泥酔して丁子風呂の女を抱いて就寝した小山田は、朝日の光に眼を醒ましたり雨戸を引けば雪のあしたの朝景色、こは遅れたりと気も転倒。気配を察して入り来る女が実は斯様而々と、浅野浪士の吉良邸乱入仇討成就から泉岳寺へ引揚げの事まで報告する。

小山田は茫然自失、嗚呼弓矢の神にも見離されしか、只一旦の心の駒の狂い出に、一年九ケ月艱難辛苦も水の泡、斯様の事に成りたるも、是れ皆大石殿の戒めを破り、飲んだる酒がてき面に……、と歎き悲しみ、傍の脇差取るより早く、我れと我が腹に突立てんとする。お松は吃驚其手に縋り、此は何故の御切腹。庄左衛門が一生の不覚、何を隠さう小山田も実は仇討党中の一人、昨日泉岳寺にて協議を遂げ、愈々推参と知り乍ら、酒の為めに心を奪われ此の体たらく、是れ庄左が恥のみか、小山田一家が末代迄の笑われ草、武勇廃りし拙者故、所詮生きては居られぬ身、此場に於て切腹致す。彼の胴巻と財布の金子、是れにて跡々を頼むぞ。と縋りしお松の手を払い、又も小刀取り直す。

夫れは貴方の御短慮じゃ。小山田様がおいで無き為、事を仕損じたと云うなら兎に角、立派に仇討を済まされた後で、此処でお腹を召しませば、小山田は党中に加わり乍ら、間際に成って風呂屋遊女に溺れ込み、切腹したと言われたら、暗闇の恥を明るみへ出すと言うもの、幸い私も独り身也。迚もお気には入るまいが、御縁有りゃこそ一夜でも、枕の塵を払うた身、江戸の風評冷めるまで、二年か三年他所へ行き、手慣れた事をなさるとして今から私を女房と、思うて永く連添うて……。と云われた時に庄左衛門、懐中に金子はあり傍から女が此の言葉に、成程左様夫れも一理、此処で死んでも誰が褒めようぞ、長い浮世に短い命、大事にしたら一生使える我身じゃものを、笑はば笑へ人の口、とお松を連れて江戸表を出奔する。

甲州身延山の麓の黒谷村にお松の縁類があるので之を頼って三年を過ごす。元来小山田は多少医学の素養があったので、其の間に頭を総髪に変え、名も中島龍石と改め、江戸は深川の三角へ出て漢法医を開業したが、妙なもので相当流行り、蓄財も出来て調子よく暮して居たが、当時有名な直助権兵衛と云う一人で名前の二つある、信州裏善光寺生れの大盗賊が、仲間に化けて住み込み、夫婦の者を薬研で以てなぶり殺し、有金奪って逐電した。

此の件は歌舞伎にもあり、皆様御承知の筈であるが、斯かる非業の最期を遂げるのも、仏教の善因善果、悪因悪果と云うものである。

小山田喜内の事

庄左衛門の父小山田喜内は赤穂退散後、妹娘縫の嫁ぎ先、芝の田町三丁目の刻煙草商鶴屋常蔵方に隠栖して居たが、彼は誠忠無二の老人で赤穂浪士の仇討を固く信じて疑わなかったが、時しも元録十五年極月十五日の朝、町内の人々の唯ならぬ気配に飛び出せば昨夜赤穂浪士の仇討成就を知らされる。

必定仲庄左衛門は其中に在りと確信し家族にも其旨を告げる。娘の注意で低い下駄を穿き短い木刀腰に紙子の羽織を着し、泉岳寺へ駈付ける。寺の門は堅く鎖されているので、喜内は扉をドンドン叩き、赤穂浪士身寄りの者でござる、御開門下されい。と云う、門番は覗いて見ると、毎月内匠頭の墓参をする顔見知りの田町の煙草屋の老爺であるので快く通してくれる。

泉岳寺では住職玉堂の好意で、熊野炭に薬灰をかけた埋み火を用意したので、義士一同之に当り乍らの休息中であったが、喜内の顔を見ても一同素知らぬ顔、不思議に思い富森磯貝の両人に向い、小山田喜内でござる、御手柄の程是れで拝見して想いやられる。御城代は何処にござるか、お目にかかってお喜びも申上げ度い。又仲庄左衛門は何処に居るかご存じならばお教えを……という。両人は心の中で、嗚呼気の毒な、仲が居ると思えばこそ、実は而々斯う斯うと、聞いた事なら老人は、可愛相に定めし力を落すであろう、と思い乍らも、両人は顔を背けて挨拶もせぬ。

御両所には御挨拶を下さらぬか、仲は吉良の邸で討死でも仕りましたか。討死、エヽ大

事はござらぬ。左様な働きして呉れれば、手前共の面目、家門の誉れ、何卒打明けてお話願いたい。ハテ不思議、伜は引場げの中には居りませぬか。と云えど願えど誰一人、返辞をだにもする者なし。

傍へを見れば武林が血潮を浴びて、手疵に悩む様子。之に向い喜内が、イヤお働きの御様子、お手柄でござる。伜庄左衛門とは別段の間柄、夜前伜は如何致しましたるか、此中には見えぬよう、在りかを御存じならば何卒お教えを、と袖に縋るを武林其手を払いのけ寄るな触るな穢わしい、と突き退ける。穢わしいとは何事ぞ、と詰寄る喜内に、例え働きは致さぬ迄も、我々同様討入った者なれば、庄左衛門は而而と、尾に鰭つけても聞かせるわ、然るに庄左衛門は十三日に至り、御城代の御手許金二百両を盗み、御亡君の御鴻恩を忘却して逐電したぞッ。と性来短気な武林、喜内の肩先をグッと突く、突かれて何で堪ろうぞ、足よろめいて雪の中、転びし所や悪しかりけん、石で破った左の頬、白妙染めし紅一点、という有様だが誰あって取成す者もない。喜内は漸く起ち上り、恐れ入ったる今のお言葉、犬侍の親なれば、穢わしいも無理ない事、御城代へお目に掛るも面目なし、嗚呼如何なれば伜に天魔の魅入りけん。現在の父に迄恥辱を与え、憎い奴でござる、お詫びを申上げます。と足は立てども立たぬ気の漸く出て来た門の外、群衆は義士の親と合点して歓声を上げる。誉められる其の度毎に、喜内は胸に五寸釘、打たるる思いの切なさを、ジッとこらえて田町へ帰る。

喜び迎える家族には何も言わず、悄然と入る隠居所の、間の襖を閉め切りて、冷光院殿御位牌を仏壇に飾り、生ける人に言う如く、伜の不忠の詫びを述べ、傍への硯引寄せて、老の身の先立つ涙と共に墨をば磨り流し、一通は常蔵へ一通は娘の縫へ、此の世の思い書遺し、腹掻き切って息絶えた。

以上は小山田父子に関する伝説であるが、庄左衛門の脱落出奔と、父親の慚死は記録に残る事実である限り、此の話は脚色は多いが大体真実の事と思われる。

我が道を行く
六十五年（一二）

西郷天風

かくて次々に初対面の挨拶がすんだ頃、露払いの演奏も終って、出演者の順も二番三番と進み、四番目には心待ちしておる私を飛ばして仙台平袴の先生が出演し、その後が私の出番となった。これは明かに先刻の感情による故意の順番とみられたが、別に意に介する程でもないので、演奏台に座し正面の桟敷を見上くれば、先生の引率による裁縫女学校の生徒の一行で一杯である。下の客席も立椎の余地もない程超満員、その七、八分は中学生等書生達で占められ、何かしら熱気溢れる感じであった。

私はその頃の得意の曲のうち「常陸丸」を演奏したが幸い客の受けも上々、安心して楽屋に戻れば主催者父子も昨日とは変って叮寧であった。

これで出演者はひと廻りしたらしく、次の番は二度目の出演だったが、それが聴衆の不満をかったものか、弥次と罵声で演奏できず中途降壇し、その次も同じ様な始末で引さがってしまった。

私は一曲丈けで責任はないのだが何となく気がかゝり、客席の後ろに廻ってステージを見れば、仙台平の先生もどうやら自信を失したらしく、初めからしどろもどろの有様に、客席のあちこちから無遠慮な弥次が飛び、やがて罵声が場内を圧せんばかりの勢に堪えられず遂に降壇してしまった。

大体其頃の琵琶会の客は、日露戦争と云う難局に堪え忍びつゝ育てられた闘志による故か、その意気はとみに激しく、今日の如く外交辞令的な拍手など薬にしたくも味えず、感情の赴くまゝに力のこもった掛け声や、腹の底より迸ばしる唸り声で場内は気が引締る感じである。もしそれ、演奏の出来栄が期待に反するとなると、その不満が直ちに烈しい弥次となり罵声と化して、到低演奏に堪えられぬものとなる。それ程聴者の態度が真剣である訳だが、それ以上に演奏者の方も必死の余りその弥次や罵声に負けておられず、つい常

軌を逸して、琵琶を膝の前に横たえ、弥次る客に血走る眼を向け、指差しながら退場を命ずる。客は亦之に対し〝雑巾で顔でも洗って出直せ〟などの罵声はまだしも、手元の煙草盆（明治時代の席亭や貸席には小形の煙草盆が四人に一個位づつの割で備えてあった）を舞台目掛けて投げつけ応酬するなどの場面を見ることも尠なしとしなかった。

これに比ぶれば今日の琵琶会は、紳士的に堕して余りにも偽善的拍手が多く、芸に対して安易にすぎ物足らぬ感が深い。この様な中での薩摩琵琶の真骨頂など闇中模索するに等しい。

若し聴者と奏者の双方が真剣勝負そのまゝの意気込みで、熱気溢るゝ雰囲気に満ちたなかに登壇せんには、先づ相当な覚悟と勇気が必要であり、幾度もそうした試練に堪え忍んだ積重ねが、やがて真骨頂への道に達し得るのではなかろうか。薩摩琵琶の将来を想う時、なぜか昔日の思出が私の胸を叩くのである。

さて余談はさしおき、前述の演奏中断も数分に至れば、客席はいよいよ騒然となり、その収拾に当惑しつゝある主催者の前に客席からの有志が現われ、速刻演奏開始を要望の末白羽の矢を私に向けられた、私はタメライながらも引受けざるを得ずして「乃木将軍」を弾奏したが、尚引続いての要望に「小督の局」をも演奏しなければならなかった。こうしてあだかも私の独演会のような形で漸く閉会となったのはよかったが、楽屋へ引込んだ途端、私は驚いた。主催者父子は既に姿を消し、お蔭で二日間の滞在延長を余儀なくさせられたのであった。

しかし、こうした事が因となって、後日この水戸市に教授所を設け、やがて貴島桃源、林龍山月、小田原国尊と私等四人の盟友による大日本琵琶国風会の創立となり、永田錦心師を招聘するやら、吉村岳城師出馬の実現を見るやらで、学問の府といわれた水戸の朝野に大旋風を捲き起すに至ったが、その詳細は後日稿を進めての折に譲るとして、その頃から琵琶界に対する自分の立場におぼろげながら責任を感じ、急遽鳳鳴会支部に戻れば満留先生は相変らずニコニコ顔で迎えられ、師範代として二階の一室に住むことになった。

この鳳鳴支部も小石川関口駒井町から、本郷西片町に移ってまだ日も浅く、門弟も尠いがそのなかに富永緋佐子と云う、ある私立小学校の音楽教師が居り、やがてその家庭に出張するようになった。そこは本郷の駒込千駄木林町で小じんまりとした、親子三人暮しの家であった。父君は帝室博物館に勤務し、明治陛下の御物係として、その筆に成る記録は常に陛下の御手元にあることを生甲斐とする老書家で、茶人でもあり茶呑友達には目賀田男爵など上流社会の人達であった。従って月に二、三度は茶の集り、とは云え二、三名ではあるが、その日の御湯番は私が承わることになったのも、二十二才の小柄な男が適材に見えたらしい、いやそれよりもこの老書家富永寛容氏には男の子が無く淋しかったらしい。それで私を引つけては何かと世話をしてみたいのではなかったろうか。

寸言（22）

大久保彦左衛門　本名は忠教（ただたか）だが通称で親しまれた。徳川家康に仕えて大阪の役には大功をたてたが一切の賞を受けず無慾の奇人として又天下の御意見番としてあがめられた。寛永十六年八十才にて没。墓地は京都寺町今出川下る本禅寺。

NHKラヂオ　十一月十六日夕五時「まFM琵琶放送　ぼろしの星」に鶴田錦史「安倍仲麿」。十二月六日同時刻「羅生門」山口速水、「静」松田静水。十二月二十日同時刻「城山」山下晴楓、「大楠公」友吉鶴心の諸氏が放送された。

一水会多摩支部　十二月二日昼一時から小金井市福祉会館にて上記開催、左記演奏後去る十一月三日石井效水氏の勲五等双光旭日章受賞の祝賀を兼ねて忘年会を開き乾盃して八時解散した。菅公ー工藤瑛秀、石童丸ー高杉洲靖、山科の別れー中村修水、静御前ー伊藤磐水、鉢の木ー石井效水、羅生門ー加藤錦陽、城山ー松田殊水、白虎隊ー中島瀑水、千曲川ー杉山旗水、